

群 教 セ	M01 - 01
	平24. 246集

自ら学ぶ意欲を育成するための 学習行動に関する調査研究

— 中学生の学習理解度と学習行動との相関関係の分析を通して —

長期研修員 平井 智久

《研究の概要》

本研究は、中学生への調査により学習の理解度と学習行動との相関関係の分析を通して、学習の理解度に応じた学習行動の特徴を基にした授業改善のポイントを明らかにし、学力の向上に向けた指導に役立てることを目指す。中学生がどの程度授業が分かると感じているのか、またどの学習行動がどの程度実現しているのかを調査分析することで、自ら学ぶ意欲を育成していくための教員のかかわり方を提言することをねらいとしたものである。

キーワード 【学習行動 学習の理解度 学力の向上 学習意欲 授業改善】

I 研究の背景と目的

1 現状と課題

(1) 先行研究の成果と課題

平成24年度「全国学力・学習状況調査」において、小学生と中学生の結果を比較すると「国語の勉強が好き」では約6%、「算数・数学の勉強が好き」では約19%、共に中学生の方が好きの割合が低い。同様に、国際数学・理科教育動向調査（TIMSS 2011）の結果でも、「数学・理科の勉強は楽しい」「数学・理科が好きだ」の項目で、小学4年生と中学2年生とを比較すると、中学2年生の方が共に25%から30%低い。次に、調査結果を同じ母集団で経年比較すると、前回2007年調査の小学4年生と自身が中学2年生になった今回の2011年調査とでは、国際平均が約8%の減少に対し、日本は約25%の減少であった。これらから、小学生から中学生へと成長するに従い、学習に対する意欲が徐々に減少していく傾向にあるということが分かる。

本県では、「確かな学力」向上計画推進資料として「授業を変える12の提言」（平成21年3月）を作成した。この資料では「学校の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して「よく分かる・だいたい分かる・分かるところと分からないところが半々・分からないところが多い・ほとんど分からない」の5段階評定尺度法を用いて、小学5年生と中学2年生の子どもに対して調査を行った結果が記載されている。小学5年生と中学2年生とを比較すると、平成16年度も平成20年度も中学生の方が授業が分かるの割合が15%以上低い。このことから、授業の理解度は、中学校の学習意欲の減退が著しい状況と同様に、小学生から中学生へと成長するに従い学習の理解度も徐々に低下していく傾向にあるということが分かる。

自ら学ぶ意欲に関して、筑波大学大学院教授の櫻井茂男氏は、学ぶ意欲が育つ過程に着目して研究を行っている。櫻井氏は、「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル（2010年）」で、学ぶ意欲のプロセスには、「欲求・動機レベル」「学習行動レベル」「認知・感情レベル」の三つのレベルがあると提唱している。知的好奇心・有能さへの欲求・向社会的欲求などの「欲求・動機」が、具体的な「学習行動」として表れ、その結果として、楽しさ・有能感・充実感などの「認知・感情」が生じると述べている。この「認知・感情」が、新たな「欲求・動機」を高め、「学習行動」の喚起へとつながり、この三つのレベルが循環しながら学ぶ意欲が育っていくとされている。欲求や動機が行動に表れる「学習行動」には、「自発学習・深い思考・挑戦行動・情報収集・独立達成・協同学習」の六つの具体的な行動があると提言している（次頁図1）。

(2) 問題の所在

教育基本法・学校教育法の改正において、教育の目標・義務教育の目標が定められると共に、学

力の重要な三つの要素が明確に示された。その中の一つが学習意欲である。知識・技能と活用力が学力の向上の両輪とするならば、学習意欲はそれを走らせる原動力であると考えられる(図1)。

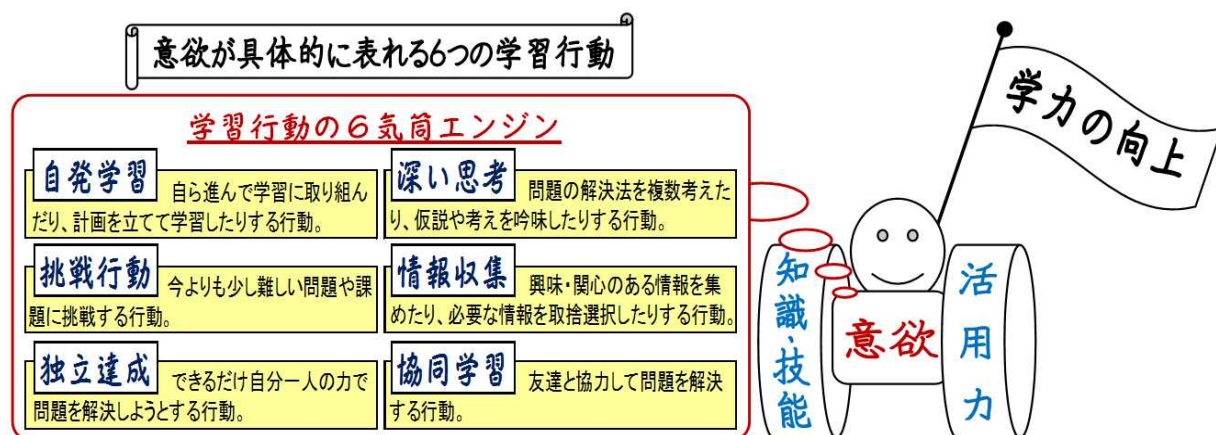


図1 意欲が具体的に表れる学習行動

自ら課題を見付け、自ら考え、時には周りの人たちと話し合いながら、「知識基盤社会」の時代を主体的に行動していくためには、自ら学ぶ意欲を育んでいくことが必要不可欠である。そのためには、意欲が具体的な行動として表れる「学習行動」を子どもたちに身に付けていくことが重要であるとする。子どもたちが「学習行動」を効果的に身に付けていくことで、学力の向上に向けて学習意欲を育むことができると考える。

中学校で学習指導要領が完全実施となった今年度、先行研究に示されているように、小学生から中学生へと成長するに伴って、学習に対する意欲が損なわれ、学習の理解度も低下することは、大きな課題であると言える。中学校修了の段階で、学習行動を確実に身に付け、自ら学ぶ意欲を育み、学習の理解度を高めていくことは大変重要であるとする。

本県では、「授業を変える12の提言（平成21年3月）」「はばたく群馬の指導プラン（平成24年3月）」などを作成し、教員の指導力や授業力を高め、県内の子どもたちに確かな学力を育成するための指導を行っている。これらをさらに有効に活用する上でも、自ら学ぶ意欲を育んでいく必要があるとする。

2 研究の目的

本調査研究を通して、学習行動の実現度や学習意欲が高まる場面などを明らかにし、学習の理解度に応じて子どもたちの学習行動を効果的に実現させ、学習意欲を高めるためのかかわり方について、授業改善の手だてや支援を県内の教員に向けて提言する。

II 仮説

生徒の学習における理解度と学習行動との相関関係を調査分析することによって、学習理解度に応じた学習行動の特徴をとらえ、学習理解度に応じた学習行動の実現に向けた手だてや支援を明らかにすることができるだろう。

III 調査対象

群馬県内の公立中学校2年生約18,600名から標本抽出により1,122名を抽出する。調査は、4段階評定尺度法を用いた質問紙調査を実施する。

IV 調査内容

1 調査の基本的な考え方

本研究は、自ら学ぶ意欲について、生徒が学校の授業が分かるかどうかの理解度と六つの学習行動がどの程度身に付いているかの実態について調査する。その調査結果から学習の理解度と学習行動の実現度との有意差を見だし、理解度に応じてどの学習行動がどの程度身に付いているのか、さらに、それぞれの学習行動間にはどの程度の差異が見られるのかについて分析する。また、学習行動同士の相関関係や「授業が分かる」に影響を与える学習行動などの分析を行う。

2 具体的な調査内容

(1) 学習の理解度

「学校の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して、5段階評定尺度法を用いて、生徒の学習の理解度を把握する。

(2) 学習行動への自己評価

六つの学習行動がどの程度身に付いているかを、4段階評定尺度法を用いて、具体的な場面から生徒の実態を把握する。

V 調査の実施

1 調査分析の視点

(1) 学習の理解度と学習行動の把握

学習の理解度と学習行動との相関関係をとらえる。

(2) 具体的な分析方法

- ① 平成16年度と平成20年度、そして今回の調査を比較し、中学生における学習の理解度について4年間ごとの変容の様子をとらえる。
- ② 学習の理解度と学習行動との関係を見だし、理解度に応じてそれぞれの学習行動がどの程度実現されているのか、また、それぞれの学習行動にはどの程度の差異が見られるのかなどを分析する。
- ③ 学習理解度が向上する際の「授業が分かる」に影響を与える学習行動や学習行動同士の相関関係などについて分析を行い、学習行動の特徴を見いだす。
- ④ 学習意欲が高まる場面を分析し、その特徴を明らかにする。

2 調査項目の選定

(1) 学習の理解度に関する調査項目

生徒に対して「学校の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して、「よく分かる・だいたい分かる・分かるところと分からないところが半々・分からないところが多い・ほとんど分からない」の5段階評定尺度法にて回答を求める。

(2) 学習行動に関する調査項目

六つの学習行動「自発学習・深い思考・挑戦行動・情報収集・独立達成・協同学習」に対して、それぞれ五つの質問内容を設定する。一つ一つの質問内容の作成に当たっては、櫻井茂男氏「自ら学ぶ意欲の心理学（2009年）」を参考にする。

(3) 学習意欲に関する調査項目

生徒に対して、どのようなときに「学習の意欲が高まったり、やる気が起きたりしますか」という質問に対して、20項目から当てはまるものすべてについて複数回答を求める。

VI 研究の結果と考察

1 学習の理解度と学習行動との関連

(1) 理解度と学習行動との関係

① 分析結果

群馬県内の中学2年生への「学校の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して、「分かる」と回答した生徒は、全体の62%であった。「授業を変える12の提言」調査（平成20年7月実施）と今回の調査を比較すると、4年間で大きな変化は見られなかった。

次に、学習の理解度と学習行動との分析の結果においては、「授業が分かる」と回答した生徒は、自発学習が実現している場合に有意に多く、「授業がだいたい分かる」生徒は自発学習がやや実現している項目の割合が他の項目の割合よりも多く表れている。逆に「授業が分かる」と分らないところが半々」と回答している生徒は、自発学習があまり実現していない場合で有意に多く、さらに「授業が分からない」生徒は自発学習が実現していない場合で有意に多く表れている。授業の理解度が向上することは自発学習が実現していることに関連があると考えられる。同様に、深い思考・挑戦行動・情報収集・独立達成・協同学習の学習行動においても、自発学習と同様の結果を得た（表1）。

表1 学習の理解度と各学習行動の実現度との有意差

		「自発学習」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	51人(6%)▲**	41人(5%)▽*	17人(2%)▽**	3人(0%)	112人
	だいたい	88人(10%)	218人(26%)▲**	101人(12%)▽**	13人(2%)▽**	420人
	半々	24人(3%)▽**	108人(13%)↓+	111人(13%)▲**	20人(2%)	263人
	分からない	2人(0%)▽**	21人(2%)	20人(2%)	16人(2%)▲**	59人
計		165人	388人	249人	52人	854人

		「深い思考」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	40人(5%)▲**	55人(6%)	15人(2%)▽**	2人(0%)	112人
	だいたい	58人(7%)	241人(28%)▲**	111人(13%)▽**	10人(1%)▽**	420人
	半々	13人(2%)▽**	104人(12%)▽**	131人(15%)▲**	15人(2%)	263人
	分からない	1人(0%)▽**	20人(2%)▽*	23人(3%)	15人(2%)▲**	59人
計		112人	420人	280人	42人	854人

		「挑戦行動」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	60人(7%)▲**	40人(5%)▽*	9人(1%)▽**	3人(0%)↓+	112人
	だいたい	87人(10%)	236人(28%)▲**	89人(10%)▽**	8人(1%)▽**	420人
	半々	13人(2%)▽**	97人(11%)▽**	125人(15%)▲**	28人(3%)▲**	263人
	分からない	3人(0%)▽**	7人(1%)▽**	29人(3%)▲**	20人(2%)▲**	59人
計		163人	380人	252人	59人	854人

		「情報収集」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	48人(6%)▲**	53人(6%)	9人(1%)▽**	2人(0%)	112人
	だいたい	86人(10%)	240人(28%)▲**	91人(11%)▽**	3人(0%)▽**	420人
	半々	25人(3%)▽**	128人(15%)	99人(12%)▲**	11人(1%)	263人
	分からない	3人(0%)▽**	19人(2%)▽**	28人(3%)▲**	9人(1%)▲**	59人
計		162人	440人	227人	25人	854人

「学習理解度の分類」

- 「分かる」
 - ・よく分かる
- 「だいたい」
 - ・だいたい分かる
- 「半々」
 - ・分かるところと分からないところが半々
- 「分からない」
 - ・分からないところが多い
 - ・ほとんど分からない

「記号について」

- $p < 0.10 \dots$ 「+」
- $p < 0.05 \dots$ 「*」
- $p < 0.01 \dots$ 「**」
- $p < 0.05$ のとき
 - 有意に多い「▲」
 - 有意に少ない「▽」
- $p < 0.10$ のとき
 - やや多い「↑」
 - やや少ない「↓」

		「独立達成」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	67人(8%)▲**	35人(4%)▽**	9人(1%)▽*	1人(0%)	112人
	だいたい	155人(18%)▲**	221人(26%)	41人(5%)▽**	3人(0%)▽**	420人
	半々	35人(4%)▽**	156人(18%)▲**	65人(8%)▲**	7人(1%)	263人
	分からない	4人(0%)▽**	22人(3%)▽*	24人(3%)▲**	9人(1%)▲**	59人
	計	261人	434人	139人	20人	854人

		「協同学習」の学習行動の実現度				計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
学習理解度	分かる	67人(8%)▲**	34人(4%)▽*	7人(1%)▽*	4人(0%)	112人
	だいたい	205人(24%)▲*	167人(20%)	44人(5%)↓+	4人(0%)▽*	420人
	半々	95人(11%)▽**	120人(14%)▲*	42人(5%)▲*	6人(1%)	263人
	分からない	15人(2%)▽**	26人(3%)	13人(2%)▲*	5人(1%)▲**	59人
	計	382人	347人	106人	19人	854人

p<.01

② 考察

群馬県内の中学2年生に行った学習の理解度に関する二つの調査を比較すると、平成20年度の調査から今回の調査では、「分からないところが多い」「ほとんど分からない」と回答した生徒の割合は減少し、逆に「分かるところと分からないところが半々」と回答した生徒の割合が増加した。今後は、「授業が分かるところと分からないところが半々」と回答した生徒が、「だいたい分かる」になるようにしていくことが必要であると考え。

次に、学習の理解度と各学習行動の実現度との有意差に関する調査では、学習の理解度に応じて、個々の学習行動の実現度に有意差があることが示された。分析結果から、授業が分かっていることが、それぞれの学習行動が実現していることに相関があることが明らかになった。学ぶ意欲が具体的行動として表れる六つの学習行動を実現していくために、学習の理解度に応じて、生徒へ支援していくことが必要であると考え。

(2) 理解度別学習行動全体の特徴

① 分析結果

「学校の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して、学習の理解度に応じて、学習行動がそれぞれの程度実現しているのか、その割合について集計した(図2)。それぞれの学習行動が実現していくと、それに伴って授業の理解度も増加していくことが分かる。また、学習の理解度別におおのの学習行動を比較すると、協同学習では、学習の理解度に応じた実現度の差は小さく、挑戦行動の差は大きいことも読み取ることができる。

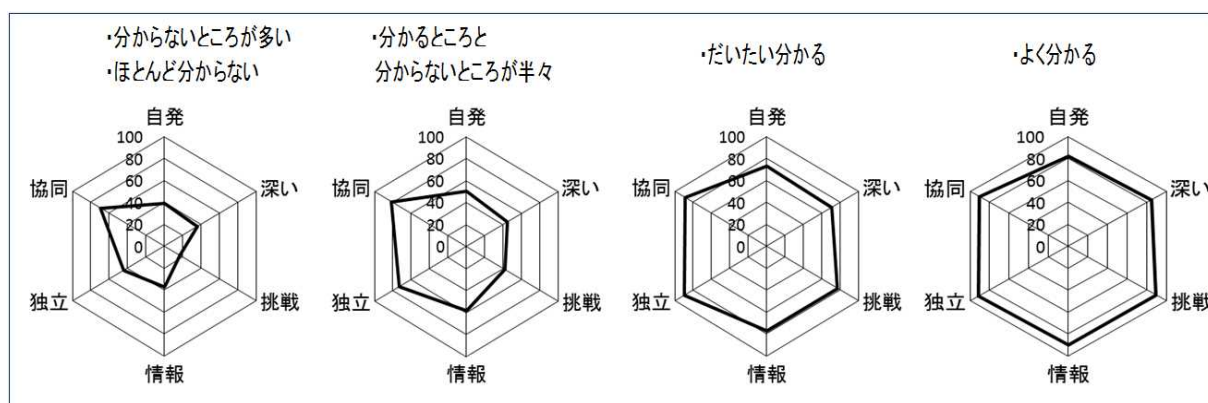


図2 理解度別学習行動の実現度

また、 χ^2 検定によっても、学習の理解度と学習行動全体の実現度との有意差について分析した（表2）。「授業がだいたい分かる」と回答している生徒は、挑戦行動が有意に多く、他の項目よりも高い。また、「授業が分からない」や「半々」と回答している生徒は挑戦行動が実現している割合が低いことも分かる。次に、協同学習では、854人中729人の生徒が実現しており、六つの学習行動の中で実現している割合が最も高く85%である。協同学習は、「授業が分かる」生徒も「分からない」生徒にとっても実現度が高い学習行動である。また、 χ^2 検定によっても、「授業が分からない」や「半々」と回答している生徒は協同学習が有意に多く、「授業が分からない」の回答群では、協同学習が実現している生徒の割合が他の項目よりも多いことが分かる。逆に、「授業が分かる」や「だいたい分かる」と回答した生徒は協同学習が有意に低いという結果であった。「授業が分かる」と回答した生徒の多くは、協同学習が実現しているが、協同学習が実現している合計の生徒数が他の学習行動と異なるため、このような結果になったと考えられる。

表2 学習の理解度と学習行動全体の実現度との有意差

		各学習行動が実現している人数（割合）					
		自発学習	深い思考	挑戦行動	情報収集	独立達成	協同学習
学習理解度	分かる	92人 (11%)	95人 (11%)	100人 (12%)	101人 (12%)	102人 (12%)	101人 (12%) ↓ +
	だいたい	306人 (36%)	299人 (35%)	323人 (38%) ▲ *	326人 (38%)	376人 (44%)	372人 (44%) ▽ *
	半々	132人 (15%)	117人 (14%) ↓ +	110人 (13%) ▽ **	153人 (18%)	191人 (22%)	215人 (25%) ▲ **
	分からない	23人 (3%)	21人 (2%)	10人 (1%) ▽ **	22人 (3%)	26人 (3%)	41人 (5%) ▲ **
計		553人	532人	543人	602人	695人	729人

【記号は p4 表1 参照】

p<.01

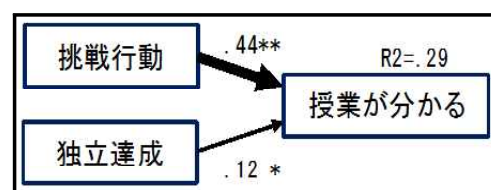
② 考察

六つの学習行動の実現度は、授業の理解度に強く影響していると考えられる。授業の理解度が向上するに従い、それぞれの学習行動の実現度も向上している。挑戦行動では、「だいたい分かる」生徒と「半々」と回答している生徒との間で特に大きな差が見られる。挑戦行動を実現していくことが、「授業が分かる」ことへ向けての突破口となるのではないかと考えられる。また、「授業が分からない」と回答している生徒では、協同学習の学習行動が他の学習行動よりも実現している割合が高い。このことから、「授業が分からない」と回答している生徒においては、協同学習を手がかりに学習の意欲を喚起していくことができるのではないかと考えられる。

(3) 「授業が分かる」に影響を与えている学習行動

① 分析結果

「授業が分からない」から「授業が分かる」へと学習の理解度が向上していく際には、六つの学習行動のうちどの学習行動が影響を与えているのかについて重回帰分析を行った。その結果、「授業が分かる」という学習理解度の向上に、挑戦行動と独立達成の二つの学習行動の実現が最も影響を与えていることが明らかになった。両者を比較すると挑戦行動は、「授業が分かる」ということに、独立達成よりもより大きな影響を与えていることも分析結果から明らかになった（図3）。



（数値は標準回帰係数）

図3 「授業が分かる」に影響を与える学習行動

② 考察

「授業が分かる」に影響を与えている学習行動の分析結果では、「授業が分かる」ようになるためには、挑戦行動が強い影響を与えていることが明らかになった。

(4) 学習理解度の向上につれて変化する学習行動同士の相関関係

① 分析結果

学習理解度が向上する過程を3段階に分けて、数量化Ⅰ類の検定により分析し、学習理解度の向上に伴ってかわり合う学習行動同士の相関関係の特徴を見いだした。まず、「授業が分からない」から「授業が分かる」ところと分からないところが半々」へと学習の理解度が向上するときは、協同学習を中心に挑戦行動、独立達成、深い思考とやや関連がある。また、挑戦行動と独立達成も相関関係があることが分析結果から明らかになった。次に、「半々」から「授業がだいたい分かる」へと学習の理解度が向上するときは、自発学習、挑戦行動、独立達成の三つの間に相関関係があり、「授業が分からない」から「半々」のときに比べて、相関関係は強くなった。さらに、「授業がだいたい分かる」から「授業が分かる」へと学習の理解度が向上するときは、挑戦行動が他の学習行動と最も多くの相関がある。挑戦行動は、独立達成と情報収集に相関があり、深い思考や自発学習ともやや相関がある。また、協同学習以外の学習行動同士は、相互に関連している（図4）。

これらのことから、学習の理解度が向上する三つの段階において、学習行動同士の相関関係にそれぞれ特徴があることが明らかになった。

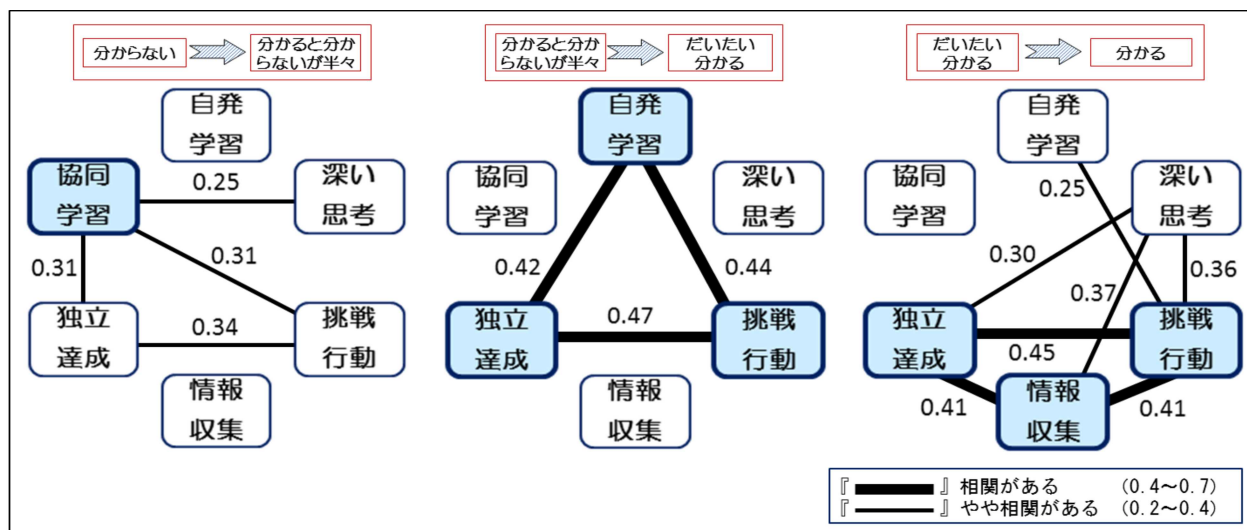


図4 学習理解度の向上に伴ってかわり合う学習行動度同士の相関関係

② 考察

学習の理解度の変化に応じて変化する学習行動同士の相関関係に着目した。まず、「授業が分からない」から「授業が分かる」ところと分からないところが半々」へと理解度が向上する段階については、協同学習が他の学習行動との間に相関があるという特徴があるため、「授業が分からない」生徒にとって実現度の高い協同学習を手がかりに、関連のある学習行動の実現度を向上させていくことが可能であると考えられる。次に、「授業が分かる」ところと分からないところが半々」から「授業がだいたい分かる」への段階では、自発学習と挑戦行動と独立達成の三つの行動を関連させることが、学習の理解度を向上させる上で効果的であると考えられる。そして、「授業がだいたい分かる」から「授業が分かる」への段階では、挑戦行動が「授業が分かる」ということに関連があり、他の学習行動とも最も関連があるので、挑戦行動を他の学習行動と関連させながら実現度を高めていくことが必要であると考えられる。さらに、授業の理解度と学習行動同士の関連性では、「授業が分かる」場合と「分からない」場合とを比較すると、学習の理解度が向上するに従い、より多くの学習行動同士が相互にかかわり合っていくことが分析結果から読み取ることができる。学習行動同士が関連し相乗効果によって、それぞれの学習行動の実現度が向上し、学習の理解度も向上していくのではないかと考えられる。

2 学習意欲と生活学習態度にかかわる分析

(1) 学習意欲が高まる場面

① 分析結果

中学2年生が、どのようなときに「学習の意欲が高まったり、やる気が起きたりするのか」という調査では、全体の約6割の生徒が「努力したことが良い結果に結び付いたとき」「授業が分かりやすいとき」と回答している(表3)。

表3 意欲が高まる場面

どのようなときに「学習の意欲が高まったり、やる気が起きたりしますか。」			計
1位	⑭	努力したことが良い結果に結び付いたとき	512人(60%)
2位	⑪	授業が分かりやすいとき	504人(59%)
3位	①	先生に自分のがんばりが認められたとき	391人(46%)
4位	⑱	友達に負けたくないと思ったとき	389人(46%)
5位	⑧	課題が簡単なとき	368人(43%)
6位	②	家の人に自分のがんばりが認められたとき	349人(41%)

さらに、学習の理解度に応じた意欲の有意差を χ^2 検定によって分析したところ、表4のとおり、まず「授業が分かる」と回答した生徒は、「自力で解決できる、少しむずかしい課題のとき」「学習のめあてやゴールがはっきりしているとき」「友達に負けたくないと思ったとき」の3項目で有意に多いことが分かる。

次に、「授業がだいたい分かる」と回答した生徒は、「授業中、活躍できたとき」が有意に多く、「授業の中に、体験や作業が取り入れられているとき」がやや多いという結果を得た。

逆に、「授業が分かる」と回答した生徒は、共に「課題が簡単なとき」「授業が分かりやすいとき」の2項目で有意に多いことが分かる。さらに、「グループや二人組で勉強するとき」でやや多いという結果を得た。

表4 意欲が高まる場面と学習の理解度との有意差

どのようなときに「学習の意欲が高まったり、やる気が起きたりしますか。」		学 習 の 理 解 度				計
		分かる	だいたい	半々	分からない	
意 欲 が 高 ま る 場 面	③ 先生がアドバイスをしてくれたとき	31人(4%)	88人(10%)▽*	68人(8%)	15人(2%)	202人
	④ 授業中、活躍できたとき	28人(3%)	120人(14%)▲*	51人(6%)	8人(1%)	207人
	⑦ 自力で解決できる、少しむずかしい課題のとき	52人(6%)▲*	161人(19%)	68人(8%)▽*	12人(1%)	293人
	⑧ 課題が簡単なとき	37人(4%)▽*	159人(19%)▽**	134人(16%)▲**	38人(4%)▲**	368人
	⑩ 授業の中に、体験や作業が取り入れられているとき	34人(4%)	170人(20%)↑+	87人(10%)	14人(2%)	305人
	⑪ 授業が分かりやすいとき	42人(5%)▽**	247人(29%)	176人(21%)▲**	39人(5%)▲*	504人
	⑫ 学習のめあてやゴールがはっきりしているとき	34人(4%)▲*	89人(10%)	49人(6%)	5人(1%)↓+	177人
	⑭ 努力したことが良い結果に結び付いたとき	83人(10%)↑+	268人(31%)	138人(16%)	23人(3%)	512人
	⑱ 友達に負けたくないと思ったとき	68人(8%)▲*	206人(24%)	98人(11%)↓+	17人(2%)	389人
	⑲ グループや二人組で勉強するとき	27人(3%)▽*	139人(16%)	97人(11%)↑+	23人(3%)↑+	286人

【記号は p4表1参照】 p<.01

② 考察

学習意欲が高まったり、やる気が起きたりする場面は、全体として一番多かったこととして「努力したことが良い結果に結び付いたとき」だった。このことから、学習の理解度にかかわらずどの生徒も、努力したことで目標が達成するなどの成功体験から、さらなる意欲へとつながり、学ぶ意欲が徐々に向上していくのではないかと考えられる。また、多くの生徒が「分かりやすい授業」を望み、学習したことが分かり理解したことで、学ぶことへの意欲に結び付いていくことも分析結果から言うことができると考えられる。

また、簡単な課題が学ぶ意欲に影響を与える場合と逆にやや難しい課題が学ぶ意欲を高めるなど、学習の理解度に応じて、学ぶ意欲が高まる時の場面が異なり有意差があることも分析結果から言うことができると考えられる。これらのことから、一斉授業を行う際、一様に同じ対応や課題ではなく、生徒の実態に応じて、意欲を喚起する手だてや支援の工夫が求められていると考えられる。

(2) 生活学習態度の分析結果

① 分析結果

生活学習態度の質問として、表5の5項目について、あてはまる・ややあてはまるなど、4段階評定尺度法を用いて調査し、その結果をピアソンの相関係数の検定を行い、相関関係を分析した。

「授業が分かる」という学習の理解度と5項目との相関関係を調べたところ「④学校生活は充実している」と「①授業に取り組む姿勢は、教科によってあまり違いがない」の2項目で、やや相関があるという結果となった(表6)。次に、六つの学習行動との相関関係を分析した。協同学習と「④学校生活は充実している」とに相関があることが分かる。また、「①授業に取り組む姿勢は、教科によってあまり違いがない」の項目では、協同学習以外の学習行動と相関があることが分かる(表7)。

② 考察

生活学習態度の分析結果から考察すると、「学校生活が充実している」と協同学習が実現していることと関連があると考えられる。さらに、「授業に取り組む姿勢は、教科によってあまり違いがない」の項目では、ほとんどの学習行動と関連があり、教科に偏りがなくどの教科も熱心に取り組む姿勢が、学習行動の実現度を高めていくことに影響を与えていると考えられる。生徒が、どの教科も意欲的に取り組むために、教員間の連携を密にし、生徒への手だてや支援を組織的に行っていくことが必要であると考えられる。生徒の様子や姿勢などの情報交換を積極的に行い、授業の進め方や手だてや支援の在り方を教員間で共有し、教科の壁を取り除いた連携の推進が考えられる。

表5 生活学習態度が実現している人数と割合

①	授業に取り組む姿勢は、教科によってあまり違いがない。	639人(75%)
②	将来、人の役に立つ大人になりたいと考えている。	765人(90%)
③	自分の進路において、将来の夢や目標がある。	655人(77%)
④	学校生活は充実している。	724人(85%)
⑤	家の人に、学校の話伝えるようにしている。	560人(66%)

表6 授業の理解度と生活学習態度との相関関係

授業との関連	相関係数
授業 — ④	0.28
授業 — ①	0.25

【相関関係の強さのめやす】

相関係数	相関関係
±0.2～±0.4	やや相関がある
±0.4～±0.7	相関がある

表7 学習行動と生活学習態度との相関関係

学習行動との関連	相関係数
協同学習 — ④	0.48
深い思考 — ①	0.43
情報収集 — ①	0.42
独立達成 — ①	0.41
挑戦行動 — ①	0.41
自発学習 — ①	0.41

※相関係数が0.4以上の相関があるもの

VII 研究のまとめ

1 成果

調査研究を通して、学習の理解度に応じて、学習行動同士の相関関係や学習行動の実現度に特徴があることが明らかになった。また、学習の理解度に応じて、生徒の意欲が高まる場面が異なることも分かった。これらの特徴を踏まえることによって、学習行動を効果的に実現させたり、学ぶ意欲を意図的に喚起したりしながら、生徒の理解度に応じた支援を通して、自ら学ぶ意欲を育成し学力の向上を図っていくことが可能になると考える。

2 提言

生徒の理解度を把握し、学習の理解度に応じた手だてを活用して、生徒の学習行動を効果的に実現させましょう。



～ 自ら学ぶ意欲を育成するための授業改善のポイント ～

◆ 全体への手だて

- 授業がだいたい分かる段階以上においては、挑戦行動の実現が大きな手だてになっていく。
(方法) 生徒の実態よりもやや難しい課題に挑戦させる場面を設定する。
- 協同学習を効果的に行うことが有効な手だてになっていく。
(方法) 協同学習の前後に一人で考える場面を設定するなど、協同学習の仕方を工夫する。
- 努力したことが良い結果に結び付くようにしていく。
(方法) 適切な質や量の学習課題に取り組ませることで、成功体験を体感させ、達成感や成
就感をはぐくむ。
- 分かりやすい授業を行っていく。
(方法) 日ごろから基礎・基本を十分理解させ、生徒が分かる授業に努める。
- 教師や家族が生徒の頑張りを認めていく。
(方法) 生徒一人一人に賞賛や励ましの言葉がけをする。

◆ 学習理解度に応じた手だて

- 特に理解度が『高い』生徒にとって有効な手だて
 - ・ 難しい課題に挑戦させていく。
 - ・ 自力で課題を解決させていく。
 - ・ 様々な方法で自ら調べる機会をもって学習させていく。
 - ・ 友達と切磋琢磨する場面を設定していく。
 - ・ 学習のめあてやゴールをはっきり示していく。
- 特に理解度が『半々』の生徒にとって有効な手だて
 - ・ 自力で解決できる少し難しい課題に挑戦させていく。
 - ・ 自分一人で課題が解決できるように徐々に仕向けていく。
 - ・ 授業中に活躍できる場면을意図的に設定していく。
- 特に理解度が『低い』生徒にとって有効な手だて
 - ・ 授業の単元や学習内容によって、ペア学習やグループ学習などの協同学習を効果的に行
っていく。
 - ・ 基本的な事項を十分理解させる分かりやすい授業を展開していく。
 - ・ 生徒の実態を把握し、適切な質や量の学習課題に取り組ませていく。

3 課題

今後は、自ら学ぶ意欲を育成するために、学習の理解度に視点を当てた生徒の実態把握に基づき、授業実践を通して学習行動の実現に向けた具体的な方法や工夫を研究実践していくことが求められる。

<参考文献>

- ・ 櫻井 茂男 著『自ら学ぶ意欲の心理学』 有斐閣 (2009)
- ・ 市川 伸一 著『学ぶ意欲とスキルを育てる―いま求められる学力向上策―』 小学館 (2004)
- ・ 群馬県教育委員会『授業を変える12の提言』 群馬県教育委員会 (2009)